
靴の相方

JoJo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
靴の相方

【Nコード】
N4467C

【作者名】
JoJo

【あらすじ】
題名を見ずに読んだ方が楽しめるかもしれません。

俺はある日、道端に突然落とされた。いきなり風が俺の中に舞い込んできたことから、持ち主から不本意にも逃げてしまったのだらう。

俺の本来いるべき場所は、不安定な人力の車に乗せられ、遠くへと消えていく。俺の居場所は後に、車を動かしている女性に叱られるのだらう。だが、そんなことは関係ない。俺は自由だ。

俺は無い目で空を見上げた。“夕方”と言う時間に、風を遮られ、踏まれながら“家”と言う場所へと帰る。では今はその途中なので“夕方より少し後”の時間なのだらうか。この時間に空を見上げたことがないので分からない。

俺の脇をすり抜ける人々は、一直線に前を見つめている。

「おう。お前、捨てられたのか」

たくさんの仲間が嘲笑しながら横を通り過ぎていく。

「いや、落とされたのさ」

言い終わる前に、仲間は去って行ってしまふ。急いでいるのではない。急がされているのだ。

自分の姿を客観的に見る、いいチャンスだ。俺は周りを目の動く範囲でしきりに観察した。

みんな重そうだ。でも実際は重くはない。例えば人間は生まれたときから、何かしら動いている。それと同じで、俺らは生まれたときから何かしら乗せている。それが生きていると言うことであり、俺らの大事な特徴なのだ。

さて、観察もいいところにして、俺は晴れて自由の身になったわけだ。何かしなくてはもったいないではないか。

しかし俺は、自分のことに關して以外は無知に等しい。今までは十分それでやって来れたが、今日からは何もかも、自分でどうにかしなければならぬ。

俺は何かを忘れていた。それが必要なものなら思い出したいが、特に必要でないものなら、ぜひその記憶の部分に新しい知識を入れてしまいたい。しかし、俺はそれが必要なのかそうでないかさえ、分からない。

「くそっ……」

自由になった自分への喜びに腹を立てた。俺は嬉しいはずなのに、どうも寂しい気持ちが出てならない。世界とは難しいものだ。

さて、何をしようか。もう一度本題に戻す。しかし、俺の試みもむなしく、彼女は現れた。

「あら、どうなさったの？」

ヒールの音を止め、彼女は女性の電話のために立ち止まった。

「落ちてしまったのさ」

「ふうん。あなたずいぶん小さいのね」

「まだ子供だからさ」

「子供はすぐに使えなくなって、捨てられるわ」

彼女は高い位置から見下してくる。

「まあな。だが、はれて自由の身だ」

「そうかしら？」

彼女は俺の言葉を軽く切り替えした。

「あなた、これから一足でどうするの？」

女性は電話をやめ、歩き出した。彼女はそれに寄り添うように着いていく。振り向きもしない。彼女に俺は、吃音さえ返せずに、その姿を見送った。

その通りだ。俺はこれからどうするのだ。自由になった？ いや、違う。これは地獄への近道だ。

俺は次第に恐怖を感じ始めた。このままでは俺の一生が、ただの哀史になってしまう。

寒さを感じた。温まっていた空気は全て逃げてしまったのだ。俺は空っぽだ。寒さを遮るものを失ってしまった。

もしかしたら、どうにかなる方法があるのかもしれない。俺は俺の生き方しか無いとは限らない。

俺は暗闇の混ざった空を見上げた。もうすぐ“夜”と言う時間だ。

とにかく歩こう。俺は一步踏み出した。この道をどのように行けばどこへ行くのか、ちっとも分からないが、行くだけ行ってみよう。ところが俺の足は一步で止まってしまった。なぜだ。しかし、空っぽの胸では感じている。何かが足りない。しかしそれは何なのだろうか。

俺はもう一度進もうとした。しかし俺の体は進んではくれない。ひもはほどこていない。擦り切れてもいない。ではなぜなんだ。俺は何を忘れている？

助けるように周囲を見渡した。先ほどのように声をかけてくれるやつは、いなくなってしまった。みんなますます急ぎ足になり、声をかける暇もない。だが、俺はこのままでは進めない。

もう一度観察を始めることにした。みんなは歩いている。俺との違いを探してみた。

そして俺は自分の記憶を掴んだ。相方がいないのだ。俺が右足を出しても、左足を出してくれる奴がいない。

街頭の明かりがつき始めた。どれが星なのか分からなくなっていく。

俺は街に埋もれ始めていた。俺はどこへも行けない。自由の身になっても、自由になる行動力がなければ意味がない。俺は一人で、ここで埋もれていくしかない。相方はここへは来てくれない。

誰かに助けを借りて、相方の所へと返してもらおう。俺は声を張り上げた。

「誰かー！ 誰かー。誰か……」

俺は自分の行動の馬鹿らしさに気づいた。俺の声が人間に聞こえるはずがない。振り向くのは仲間ばかりだ。その仲間さえも次第に振り向かなくなっていく。みんな振り向く暇もなく急がされているのだ。

俺は霧消と化して行く。そんな気がした。それが一番いいのかもしれない。簡単に自由を手に入れた、自分への罰だ。

街灯に馴染んで星が輝く。俺は凍えながら、ただ世界を見つめている。

なぜ、このようなことに。問いつめながらも、答えを追求しようとは思わなかった。

人々の足は次第に早くなる。時間が過ぎれば過ぎるほど。

俺はタイムマシンに乗っているようだ。仲間を見送り、出迎える。みんなを見つめながら哀歓を味わう。

星に照らされ、目は次第に薄れていく。

これは愛顧だ、などと、誰かを恨んだりはない。

ああ、寒い。俺は氷に襲われたのか。それさえも分からないほど目は薄れる。

光が朦朧と流れる中、突然俺の何かが切れた。

これでいいんだ。霧消に。

目は真っ暗と、時の果てを静かに語った。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4467c/>

靴の相方

2010年12月10日19時39分発行